

中川秀昭（なかがわ ひであき）

姫路城を守る会理事長

元姫路市立城郭研究室長

【プロフィール】

1948年姫路市生まれ 神戸大学経営学部卒業

民間企業で勤務の後、1972年姫路市役所に入所。2008年3月、姫路市立城郭研究室長を最後に定年退職

その後、再任用で城郭研究室に残り、『世界文化遺産・国宝姫路城の基礎知識』姫路市立城郭研究室刊の編集・執筆に携わる。

定年退職を機に、2008年5月姫路城を守る会副理事長、2009年5月姫路城を守る会理事長・研修部会長に就任、現在に至る

また、

- ・姫路市立楽寿園教養講座講師（2013年4月～現在）
- ・各姫路市立公民館講師
- ・放送大学兵庫学習センター非常勤講師（面接授業）就任予定（2015年10月～2016年3月）

ほか、各所で姫路城を中心に歴史関係の講師を務める

著書 『姫路 BOOK』神戸新聞総合出版センター（共著）

季刊誌『パンカル』2015年6月号刊「姫路城特集」の
「姫路城と意匠」を執筆担当

【姫路城を守る会】

- ・目的：世界文化遺産・国宝姫路城の維持保全並びに顕彰に協力し、以って郷土文化の向上発展に努める
- ・主な事業：
 - ・姫路城の顕彰及び整備保存に協力
 - ・姫路城の歴史的及び文化的継承事業
 - ・本会の広報及び研修事業
- ・事務局：姫路城管理事務所内（姫路市本町68番地）
- ・会員数：約500名

全国各地にあった数多くの城は、明治維新後の廃城令による取り壊しや太平洋戦争などの戦災で失われていきました。しかし、姫路城は幾度かの危機を乗り越え、多くの人々の文化財保全に対する強い熱意に支えられ、天守をはじめ櫓や門、土塀など国宝8棟、重要文化財74棟にのぼる数多くの遺構が現存し、昔ながらの姿を今に伝えています。

●羽柴秀吉、池田輝政、本多忠政、三代にわたる築城

姫路城の歴史は、最初の築城説に諸説ありますが、はじめて天守を持った城郭が築かれたのは1581年。黒田孝高(官兵衛)の勧めに従い、羽柴秀吉(豊臣秀吉)が、中国・毛利氏攻略の拠点として三層の天守を持つ城を築きました。

関ヶ原の戦いの後、1600年に徳川家康の女婿、池田輝政が播磨国52万石の領主として入封しました。輝政は、1601年から姫山を中心に城と城下町の造営に取り掛かり、姫山では、秀吉時代の天守などを取り壊し、石塁などを生かして8年の歳月と延べ数千万人とも言われる人員を要し、5重7階(地上6階・地下1階)の大天守と三つの小天守を渡櫓で結ぶ連立式天守をいただく姫路城を完成させました。

また、城下の町割りにも着手し、姫山を中心に左巻きに三重の濠をめぐるし、内濠の中を内曲輪、中濠の中を中曲輪、外濠の中を外曲輪とし城と城下町全体が濠と土塁で囲まれた総構え方式の縄張りを行いました。

そして、1615年の大坂の陣の後、1617年には、池田氏三代の後を受けて本多忠政が入封しました。忠政は1618年、鷲山に西の丸を造営し、嫡男忠刻と千姫(徳川家康孫娘)の居館や西北の防御のための多聞櫓を建設。三の丸には忠政のための居館(本城)や向屋敷、武蔵野御殿、さらに中曲輪内に東屋敷や西屋敷を次々と建設し、この忠政の御殿群の建設によって姫路城の全容が整えられました。

●縄張りの妙と籠城に備えた大要塞の城

姫路城の内曲輪には、天守丸のある本丸を中心に、二の丸、三の丸、西の丸が配され、本丸や二の丸は、小さな曲輪がひな壇状に集合し迷路のように複雑に別れた古いタイプの縄張りに対し、西の丸や三の丸は、平らにならした大きな一つの曲輪で構成され二つの異なるタイプの縄張りが共存しています。

一方、内曲輪には城郭と居館、中曲輪には侍屋敷、外曲輪には町家や寺院、外縁部には侍屋敷や組屋敷を配置し、らせん状に三重にめぐらされた濠の内側は土塁や石垣で固められ、城門には枡形虎口が採用されました。外曲輪には飾磨津門や備前門をはじめ5門が、また、中曲輪に野里門、清水門、車門など11の城門が置かれ、城と城下町全体が総構え方式の縄張りで厳重に防備が固められていました。

姫路城の大手口は、木橋の桜門橋を渡ると、桜門、桐二門、桐一門の二重の枡形門で厳重に防備されていました。今は、陸軍の手により戦前建造された大手門がその威容を誇っています。さ

らに三の丸広場には、かつては武蔵野御殿や向屋敷があり、少し高台にある千姫ぼたん園には、かつて城主が政務を執り行った本城（居城）がありました。

そして、菱の門を入ると荘厳な連立天守群が目前に迫ってきます。しかし、敵を分散させるためにつくられた「捨堀」と言われる三国濠。今に残る菱の門・備前門や「いろは歌」でなづけられた21の城門、イロハ歌や化粧橋、井郭橋など用途でなづけられた27の櫓（東・西・乾小天守、四つの渡櫓を除く）、長方形（矢狭間）や円形、三角形、正方形（鉄砲狭間）などの狭間があげられた32棟の土塀が立ちほだかり、迷路のように複雑に入り組んだ縄張りと合わせ防御が固められていました。

最後の砦となる天守には、台所が付属し、地階には厠や流し台を備え、地上6階、地下1階の大天守と西・乾・東小天守が中庭を囲むようにイ・ロ・ハ・ニの渡櫓でロの字型につながれた連立式天守を構成し、まさに籠城に備えた大要塞の趣を呈しています。

● 往時が生んだ最高傑作の「美の遺産」

本来、城は軍事施設として外敵からの防御を考え、そこに先人達の知恵や技術が注ぎ込まれ防備と攻撃を考慮した堅牢な構造になっています。まさに姫路城もそのような構造を備えていますが、播磨平野に聳える姫路城は実に美しい。

姫山と鷲山の地形を巧みに利用して、大・小天守はもとより櫓、門、土塀、石垣や濠、土塁の配置に至るまで、平面構成から立体的な構造、細部の処理に最高度の創意工夫が施され、見事な構造美、様式美が作りだされています。

1576年織田信長が我が国で初めて天守を持つ安土城を築き、近世城郭の扉が開かれ織豊系城郭の築城期を経て、1600年、関ヶ原の戦いの後の築城ラッシュから1615年の大坂の陣に至るわずか約40年の間に築城技術は高度な発展を遂げました。

姫路城は、まさにこの城郭建築が最盛期を迎えた1601年から1609年にかけて築かれた現存する城郭建築の最高傑作と言えるでしょう。

大天守と東・乾・西小天守の三つの隔櫓をイ・ロ・ハ・ニの渡櫓で連結する連立式天守が織りなす優美な姿、白漆喰総塗籠の白壁の広がり、5重の大天守の各層がバランスよく消滅され、入母屋破風、千鳥破風、軒唐破風の巧みな配合が快いリズムと構成美を生みだしています。

また、幾重にも張りめぐらされた複雑な縄張りが、姫路城の堅固な防備の様子を示すとともに、この縄張りに合わせ櫓、門、土塀などが複雑に入り組みながら独特の様式美を生みだしています。

● 連立式天守の華麗な姿と細部にわたる美へのこだわり

このような中でも姫路城の美を表現する代表は天守群です。とりわけ、大天守と左に乾小天守、西小天守を従えた、西南からみる連立天守群のアウトラインは、名城としての光景をひときわ際立たせています。

また、天守には寺社建築などに多用され城の天守の飾りとして盛んに応用された破風がバラ

ンスよく配置され、破風の中央を飾る懸魚も盛んに使われました。この中でも、千鳥破風によく用いられる梅鉢懸魚、入母屋破風などに用いられる燕懸魚やこれを三つ重ねた三花燕懸魚、軒唐破風には兎毛通が天守に彩りを添えています。また、軒唐破風の下には藝股が配され天守の装飾性のみならず格式をひときわ高めています。

岡山城の鳥城に対し、姫路城の白鷺城とたびたび両城は対比されてきました。前者が、外壁に板を張り、墨と柿渋を混ぜた防腐剤(黒漆の例もある。)で外壁を黒く塗られた下見板張りに対し、後者は土壁の表面に漆喰を塗り建物全体を塗籠た白漆喰総塗籠。下見板張りに対し防火性に優るが耐水性に劣る塗籠をあえて使い、城主の権威や見栄えの良さを重視した池田輝政のこだわり、「美しさ」への執念を感じざるをえません。

天守や櫓の壁面には、実に巧妙に窓や狭間、石落しが配置されています。窓も防御を考えるとともに、装飾性も重視した多様な窓が開けられています。大・小の天守には柱を中心に左右半間毎に格子窓が等間隔に配置され幾何学的な美しさが演出され、乾・西小天守の最上階や菱の門には、黒漆塗り、金箔金具で飾られた華頭窓、また、天守各渡櫓やぬの門などには鉄格子窓、そして、大天守の軒唐破風の下には、石落しの付いた巨大な出格子窓が大天守の壁面を飾っています。

姫路城の石落しは、袴の裾を開いた形に似た袴腰型が大半で、白漆喰で塗籠められ効率よく配置されたその姿が城の美にアクセントを与えています。そして、矢や鉄砲を放つため天守や櫓、土塀の壁面に開けられた長方形、正方形、三角形、円形と様々な形状の狭間が、美しいリズムを醸し出しています。

姫路城に現存する城門は、櫓門、高麗門、棟門、埋門と様々な形状の門が合わせて21を数え、それぞれ特徴的な形を留めています。これらの門扉や門柱には、根巻金物や飾板、饅頭金物や八双金物などが美しく飾られ豪華さを演出しています。

さらに、姫路城の瓦は、平瓦と丸瓦を交互に組み合わせた本瓦葺で継ぎ目には屋根目地漆喰が一面に施され葺の美を表現しています。また、大天守の大棟などを飾る「火除けの呪い」として使われたと言われる鯨が姫路城には数多く据えられ、輝政が築城にあたり取り入れた高麗瓦(滴水瓦)が天守や櫓などの軒先を優雅に彩っています。

また、姫路城の城郭美を象徴するものとして石垣も大きな要素です。姫路城には、羽柴時代、池田時代、本多時代とそれぞれ築城の時期に合わせて三つの異なる石垣の積み方が採用されています。自然の石をそのまま積まれた羽柴時代の「野面積み」、積み石の接合部を加工し積んでいく池田時代の「打込接ぎ」、本多時代には「打込接ぎ」が大部分ですが、一部に積み石を大きく加工して積んでいく「切込接ぎ」と多様な石積みが見られます。そして、算木積みによる「扇の勾配」や高さ23.32mの帯の櫓の高石垣、高さ14.8mの天守台石垣など石積みの様式美も雄大な姫路城の美をひときわ際立たせています。

中川秀昭(元姫路市立城郭研究室長)